

五行歌

秋山昭子

(藤沢日曜歌会)

街中の

ブロック塀に

しなやかに

たたずむ

薊一株

新井奈々草

(藤沢火曜歌会)

愛用品

納めのメは

デイオールの紅

姉の生涯に

ルージュ引く

浅野征子

(藤沢火曜歌会)

表面ではわからない

人の心根

見えかくれする

本音つかめず

人の関りのむつかしさ

飯田敏一

(藤沢火曜歌会)

「千曲川いざよふ波の…」と

藤村がこよなく愛した千曲川

穏やかな流れが

突然牙をむく

自然の力にただただ呆然

石川 トシ

(藤沢火曜歌会)

亡^は姑^はの柩に

着せてあげた

青の色無地

雲一つない秋空に

思い出している

伊藤 美紀子

バスキアの絵が

しゃべりだす

夕日を背に

富士山頂に

『今ここ』

いさを

今泉和枝

(湘南五行歌を楽しむ会)

公民館祭りの

展示歌を選定する

今年も

子供たちの

五行歌に癒される

(湘南五行歌を楽しむ会)

強いイメージの平成から

柔らかい感じの令和へ移行

平成は災害で

苦しんだ人が多かった

令和には穏やかな時を望みたい

いわき やすお

(藤沢火曜歌会)

鬼灯のふくらみに

触れてみた

ふるえる指先に

夏があかく

ときめいた

牛島 芳一

(藤沢火曜歌会)

ひもじさを

夏雲の中に

閉じ込めた

少年の日の

遠く遙^{はる}けし

H ぜんや

(藤沢日曜歌会)

バックミラーに映る景色は

全て過去である

これでいいのかと

問いかける暇もなく

目の前には今が現れる

遠藤 由里

(藤沢日曜歌会)

「ハイイ 動かないで」

「ハイイ 息を止めて」

レントゲン撮影は

死ぬ練習を

繰り返ししているようだ

大橋 克明

(藤沢火曜歌会)

どんな酒でも

新絞^{あぶら}りは

口になじまないが

時間と場所を得ると

熟成の芳香を放つ

大宮 啓子

(ひまわり)

神に会い

仏にも会い

退院日

その日の空は

藍(愛)色

岡本 まさ子

(藤沢日曜歌会)

八月

腹の内

ひびき

とまらぬ

慟^ね哭の音

小原 美子

(藤沢日曜歌会)

台風の爪痕は

大きいのに

秋の空は

悠然とかまえる

鯨のような雲

元 永 和 生

(湘南五行歌を楽しむ会)

「こうなるんだよ！」

と孫

「できないんだよ！」

とじいさん

スマホが笑ってる

花 乃 香

(湘南五行歌を楽しむ会)

雨上り

裏山は緑

風はピンクのごとく

桜の花びらひらりひらひら

雨雫はダイヤモンド、きらりと

叶 多 草 心

(湘南五行歌を楽しむ会)

風 言 霊

草木花

音楽

友

余生満心

古 在 由 美 子

(湘南五行歌を楽しむ会)

辞書には「西瓜と

胡瓜はウリ科の一年草」

すいかは甘美、きゅうりは

堅実が私の感想

異なる味わい

桜子

(湘南五行歌を楽しむ会)

巖と富士

黄金の風穂を渡り

愛しく揺れる

うす紅色の

秋桜

清水 ゆう子

(湘南五行歌を楽しむ会)

朝一番に庭に出て

朝顔におはようと挨拶

何色の花が咲いたかな

いくつ咲いたかなと

楽しむ猛暑日

実川緑映

(湘南五行歌を楽しむ会)

結局

心に通わすのは

言葉です

良いことも

悪いことも

常翔

(湘南五行歌を楽しむ会)

花を飾る

玄関に・リビングに・キッチンに

癒された瞬間

友は月下美人が咲いたと…

感動のおすそわけ

下郷弘子

(藤沢日曜歌会)

昨日は昨日

今日は今日

その日の出来事で

詩を作っている

これでは日記と同じかも

笙

(藤沢日曜歌会)

素朴な紅玉の

色香

パテシエに

深く愛され

口福を配る

杉本明美

(藤沢火曜歌会)

縁は不思議

忘れ去ってしまう人

時どきフツと浮かぶ人

ある時急に懐かしくなる人

縁の糸が切れてしまったか

細くても繋がっているか

鈴木春野

(藤沢火曜歌会)

かくわ
芳しさと

程好い

塩加減の葉

あつてこそ

さくら餅

素世

高田明美

(湘南五行歌を楽しむ会)

(藤沢日曜歌会)

台風ののち

送り盆

残暑厳しく

ホオズキが

あの猛威

好きだった妹

嘘の様

古里の魚野川に

ちぎれた葉・枝

流す想い

草庵

高原伸夫

(藤沢日曜歌会)

(藤沢火曜歌会)

まあいいか

神田川面影橋は

鳥に取られし

散り桜の風情

手袋は

川面の花筏に

お山の罫ねむらで

二年前の

赤子あかこ抱く

母が重なる

高 原 美 智 子

(藤沢火曜歌会)

しなる指先

くねる身体

人魚のような娘こが

プールに戻ってきた

水もきらめく

千 壽

(藤沢日曜歌会)

かあさんは

そこに

居るだけでいい…と

言ってくれる

望外の幸せ

寺 田 篤 弘

(藤沢日曜歌会)

喜びなさい

歩けることも

目が見えることも

奇跡です

未来からの私への手紙

藤 堂 立 夫

(湘南五行歌を楽しむ会)

春本番

青空に競い立つ枝々の先に

新緑の若葉ひ陽に輝く

一寸遠くなつた友に

電話してみるか！お茶誘うか！

紫 友

の こり

(湘南五行歌を楽しむ会)

(湘南五行歌を楽しむ会)

六十年目の贈りもの

写真館で撮った

桃割ももわれの髪型の私

その時心から

神様、この時にもどしてと

西 田 朋 子

橋 本 圭 子

(藤沢火曜歌会)

(藤沢日曜歌会)

髪型、眉毛、アクセサリ…

近頃の男子は

めっぼうにオシヤレだが

それもそのはず

孔雀の雄を見よ

色んな傘が

日向ぼっこしている

かわいい家

笑い声が

聞こえてくるようだ

蓮村 詳子

(藤沢火曜歌会)

平凡過ぎる

日々の暮らしが

幸せなのだ

気付かされる

新聞の三面記事

ヒデオ

(藤沢火曜歌会)

川沿いの枝に

シマフクロウ

人間のカメラを

知ってか知らずか

自然の子だと言いたげに

久田 文

(湘南五行歌を楽しむ会)

桜満開

「令和」に

カンパイ!

花見酒は

歴史酒

ヘンリー

(湘南五行歌を楽しむ会)

秋立つと聞き一万歩

脳によいと老人喘ぐ

ついに巨大台風直撃

翌日秋空冴えて月齢九

時巡り草木は春に笑う

正

(湘南五行歌を楽しむ会)

あら、あら

こんな所に居て

大きくなつたわネ!

毎晩出て来る

蛙

松岡雅子

(藤沢日曜歌会)

なんでもないときの

なんでもないことに

その人の

らしさが

のぞくことがある

雅子

(湘南五行歌を楽しむ会)

胸がいつばいで

「こんな娘ですが、よろしく。」

と言っちゃったけれど

本当はこう言いたかったの

「親バカですが自慢の娘です。」って

松本希雲

(藤沢日曜歌会)

西の空 遠く

眩しい光を放ち

夕陽が沈んで行く

あの雲の果てに

故郷の夕焼を想う

村上玲子

(湘南五行歌を楽しむ会)

”秋には逢いに行くわよ”

約束の電話は二カ月前

それなのに

旅立ったあなた

その声がまだ聞こえてきます

茂木 知恵子

(藤沢日曜歌会)

歌も恋も

枯れてゆく

晶子にも白蓮にも

なれない

深い夜

ゑみ

(湘南五行歌を楽しむ会)

青葉若葉の

木の芽だち

新鮮な空気

せいいつぱい

吸い込む

保田 孝

(湘南五行歌を楽しむ会)

神経すい弱で

じいじは75才なのに

5枚しかとれない

ボクなんか

5才なのに30枚だぞ!

山口博子

(藤沢火曜歌会)

裸で駆け回る弟を
ガシツと掴んでは
肩車してくれた叔父
95歳で逝った私の
昭和 又消えて行く

横山礼子

(藤沢火曜歌会)

会えなかった祖父の
昔を知る九十過ぎの記憶
「穏やかで
尺八なども吹いていた」
心の奥、繋がる想い

吉田 栄

(藤沢火曜歌会)

右往左往に飛び回り
羽根つきしているような花・花・花
光を通した花弁びらは水晶の輝き
思わず・・・きれい!
窓辺のシャコバサボテン